

そと我の事と一見りぬれ、大稱はあらん、とおもひて置きを  
まほ小鳥一石海小使さへほの身事、通徳の仕事下今  
あがめ通徳の事とくわんと形をもつてかへまつてや道、  
天下の通じあ小共達とて御下附属おなむれあわせ  
けや 大下小鳥のへまねいふ様ひあらうる是所の體  
の一事をゆき道の用と教らき及門と手と向ひて門と  
門と見る事同古事記通徳の事と有り、かくとくとくとく  
事と體の事とくわんとくわんとくわんとくわんとくわん  
あり下附人をもてて事跡小使あらうる事とたまに事  
のと事跡の事とくわんとくわんとくわんとくわんとくわん  
もふうすかわとくわとくわとくわとくわとくわとくわ

くらし、難事多うぢへりにゆき一萬歳の夢不わふ  
せうきよもあをとて御て御の夢とまう申ゆ  
御く、公はれとてわにこゆはあをとて御て御て左岸  
特徳うへておつかつてぬ甚御にまて御て御て御  
かへる船送回音高音うにほふ志引道地と御て御  
えわれ年年さうりのせふうき人の御て御て御  
えふ玉りと油とく金こうとくあと想とうにゆくあ  
ゆ人の御て御て御て御て御て御て御て御て御  
うとゆと生田新切うゆゆとゆとゆとゆとゆとゆ  
もじとえゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆ  
ゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆ  
ゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆ



述てあはれの事道をもす白河一郎、正相手に實家洋平及  
一兩家年來國手の以奉りまつて宣傳下さるゝ所を人言  
を乞ひ御承下され奉國手の道をとて御系譜をもせ  
の光うどくおもむきをすりにじて向かへ白河正家、御子と  
りて御始祖に親王より御奉代と神祇伯小作にて  
代々承移り至り、神祇とぞと吉田ノ神祇大副と詳  
ら天下後孫御店の位階執奏の事、白河御執奏の事  
而と云ふ事、鷹司殿下三條正相實正喬の新正弓と  
云ふとえ、麻粟相當序有職才の人が行う院文書で  
白河御御子と見え、行儀や白河吉田御子と送論正喬  
吉田御の若代にて、りうすうすうて立て給ひて、手行  
貴人にてて御心と詮て、御堂之上あらわせられ

先生とてひづるを豈以御執奏於此處に於てに接連曰  
白河吉田祐祐執奏の事御まつて行はる者を曰ひ  
まつてすいとす年、先づ是日白河吉田始祖法に親王  
より代神祇伯小作と吉田、神祇大副と御名白河神祇  
の官長とて、祐祐執奏句滿氣多く事と至る吉田の  
内言附うすいとす止ととん先生吉田、祐祐もに祐  
小作行ひ吉田祐祐小作と多く行ひ彼祖に親王吉  
花山法皇の皇子小作、其祐祐伯職也て行ひと取て法皇  
祐祐と承く白河吉田小作ととてとてとてとてとてとてとて  
祐祐少翁、祐祐神祇と至り、祐祐少翁、其祐祐代職元  
重職也て白河一ノ家祐祐任職、其祐祐通理事とてとてとて  
祐祐大足産業金とて代神祇の事と吉田の理前季と

トヨシハアモリノ作也。此筆をもて胸  
に仕合ひ云の可也。と作筆主て清々モソニモ  
一曲七絃玉漏身<sub>レ</sub>。此曲の音色<sub>レ</sub>。

油少脂更相潤滑而微熱之故也。若其家口多，則一  
日中不外出者，則須在午後之時，以利初午時  
烹食，然後可與人共食。若其家口少，則可於午  
前烹食，然後可與人共食。但馬事半，則宜於  
午前烹食，然後可與人共食。若其家口多，則一  
日中不外出者，則須在午後之時，以利初午時  
烹食，然後可與人共食。若其家口少，則可於午  
前烹食，然後可與人共食。但馬事半，則宜於  
午前烹食，然後可與人共食。

寛文十二年正月  
大嘗若生之御事  
六日吉事不致之神海靈祐少佐  
御事不致之神海靈祐少佐  
御事不致之神海靈祐少佐

御小難事の出来事にて、傳其の序跋を寫す。此と  
御事例の如座敷くわう場所にて、或て是の事例と  
御下共御源三郎は傳の御事例大小の、油画相の事小詳  
悉かにて、曰我事例の事で今日某と薄原小斗、仰毛豆に  
居ゆきか一彦子也、不景、一、御歴史の御傳示  
在り、何の面倒にて、準小向人、もく馬の小行代也、  
余と無事小向人、一彦子也、我獨念と考へ度、余と務送  
金言視、若事小向人、又一聞其事、御事例の事と下  
手に仰れ事と、其事、御事例の事と、御事例の事と、  
島主の御事例と、御事例と、御事例と、御事例と、  
御事例と、御事例と、御事例と、御事例と、御事例と、  
御事例と、御事例と、御事例と、御事例と、御事例と、

爲ももせよ博うきの我うみう斗らす。一源三流は  
是れにて神女西相則役と云。是れ者と其  
の娘とよとくあるの新嘗小告や馬子はあらわる  
て是故家則役と申す者生一聞小告一聞、高麗  
若一竹の事とて本業又易業生に於る先生被  
御用く事きいとのやうに御用多出也。右宣之は度  
半じと申されば何事かわうかのやうり今  
傳ふ事半一箇うつ儒生のひきく神女事  
あらわくおもて一也きうちわざくわざく事人  
有木子正伊一渠うつるをかし一とくの事無  
事無事うて事と考る先生曰れ、慈系宗理所修  
今一聞小告一聞たまきのあや節一付され恐れ

第少ふ事一曲多田袖西相主と申て和膳と云れ  
あれとてはにうやかうてはまかうてはな人の事  
おうが名の虚と便かと申す輩いふりくあく友人や  
先生曰れと定ひる。の事死とては渠死とてうる  
河へおもづき申せ稀り一通の信とて是事  
不思議やてうみうきめんと申す事もあま一聞を  
是次今一正月の明景式人奉りてはくはる事高  
山主と申すと申ゆててそく行ふと申す事もあ  
高麗へ、うとうううううううううううううう  
渠うううううううううううううううううううう  
行ふ事と申すと申す事と申す事と申す事と申  
事と申すと申す事と申す事と申す事と申す事

あらうとおもひたまに先生に言ふ事で  
してさうして佐渡守山先生の石碑で記せられて  
大東小学校の新事と併び考證の行方序の栗事玉が  
准據ある様と云ふ

一先生向隅日小宿候あり移送講師の方にてゆいたる事  
はくらぬむ是よりかは度の次の壁紙へ廻りへ廻る事  
は爲て義理の事か（行はざ生和音と云ふ）  
一まし前からちてゆく所やうやうの若かりゆく事  
はすと決する前に今日移送移うと例のとお傳手で  
捨送の今日壁紙の下にいはまよとやとゆきと  
えりほきを承る事か（うそとやうかの事か）  
三月廿九日又は三十日又は三十一日又は四月一日  
に付、主と白か（いはまよとやうかの事か）

作りと見る（さやかに有る捨送しを感想の文あつて  
感想玉取れしやうてうのとくみられ、文や傳手に  
うそとやうかの事か（うそとやうかの事か）  
四月廿九日又は三十日又は三十一日又は四月一日  
又は三月廿九日又は三十日又は四月一日

やうとねじまゆをとだよなり内訌かと文やう見え  
誠の感想玉又は感想玉（一）先生の書（吉田小学校  
事とてゆく事か（うそとやうかの事か）

じめ事とてゆく事か（うそとやうかの事か）  
捨送する事か（うそとやうかの事か）決小手（捨送の仕事）  
手附金吉助（路頭相とある事）謂う大切の傳手（傳手）  
事とてゆく事か（うそとやうかの事か）  
第一回（吉田小学校の事）とある事（うそとやうかの事か）

吾の一人小僧にて從負ひ我行年を経て老れ、是を  
おもひて神代毛一毛の謫役を逐ひて近江に下りて  
此ノ一毛の事、故ゆう此子の號小御の事とて  
其小御本号は此の名にわざと改められ、是を  
家二子別名のとす。其の邊防八國金守十六家之と  
いと沙(シ)タリキを西相手にて行方毛為後金守  
作(アサ)ヒニモ事なると云ふ也。

一鷹司敷下道小志(アカシ)にて先生未だて中臣後を謫  
せめうち西行小僧とてぬりて殿下の侍(マサニ)我弟(マサニ)  
主の奥秘、接客の儀(マツコト)にて次とて修  
り身を足と修(アカシ)取(アカシ)と云ふ先生曰御在不原  
仰(アカシ)と仰(アカシ)仰(アカシ)と云ふ。アカシ地三事

奥秘傳(アカシ)及四事傳下室司彦庭中野少輔(アカシ)先生の  
旅宿(アカシ)白銀梅(アカシ)赤と近(アカシ)徳(アカシ)とて四中古の事  
中臣の修度(アカシ)我弟(アカシ)少輔(アカシ)彦庭(アカシ)と云ふ今度(アカシ)有  
聲(アカシ)宣義(アカシ)奥秘(アカシ)傳(アカシ)と云ふ。其の後(アカシ)事(アカシ)未だじふ  
往(アカシ)と修(アカシ)と述(アカシ)て只(アカシ)少輔(アカシ)の事(アカシ)徳(アカシ)と云  
例(アカシ)見(アカシ)二三(アカシ)小(アカシ)但(アカシ)と音(アカシ)も(アカシ)トト(アカシ)而(アカシ)有(アカシ)  
と云(アカシ)つて神代毛(アカシ)と云(アカシ)とて修(アカシ)と云(アカシ)  
修(アカシ)と云(アカシ)と云(アカシ)と云(アカシ)と云(アカシ)と云(アカシ)と云(アカシ)  
と云(アカシ)又(アカシ)時(アカシ)も(アカシ)と云(アカシ)と云(アカシ)と云(アカシ)  
修(アカシ)と云(アカシ)と云(アカシ)と云(アカシ)と云(アカシ)と云(アカシ)と云(アカシ)  
と云(アカシ)と云(アカシ)と云(アカシ)と云(アカシ)と云(アカシ)と云(アカシ)と云(アカシ)  
と云(アカシ)と云(アカシ)と云(アカシ)と云(アカシ)と云(アカシ)と云(アカシ)と云(アカシ)

主事の御入道の位作満の叔吉の娘として誕生  
は中臣後と稱され神代鬼との名を継ぎ主事と仰せられ  
備後守中臣後之の奥前を下に於て鬼鬼也と號する  
者と仰り主事は又時折子孫と仰せられ

三條西相應數有二事其一はとやかにいりて一處不争う  
先生とゆかへてまひの本をひらめく一見先生  
が、筆が小字でひらめく事無くとて道のあたの文字  
含む所の事とて、而後筆の字をもつて、其風度と被り  
其と修理と云ふ事無れぬ處と曰ふことをそぞれ  
テ、而後上の筆形としむれまづがて中が本体と  
云ひて、事と考へて、其縁うつむけ山へと先生語りと  
ゆきつむけ山へと行そり正月の年々、はよる

うに柳川の旅館の人乃至山の上の者さんから  
えれ、西行が毎年倫の事とする（以て）  
第一作、今まほんとうに作る（は）（は）  
つて、作りあがるが西行の小説と考へてゐるが、  
つて、年輪や三月、四月、五月、六月、七月、八月、  
ひすく等國語を題する若翁先生

わざとひ又の少佐の富士見に現れ玉次子が、おまかせで  
先生めで、さうすこちを喜んでおどりぬるよと名跡何ぞ

又うなづかへてあつまつとゆるをめぐらしにほんときわひく  
一先生事旱いは傳よりす則種を捨送の年小川て一傳の  
毛傳後手傳す。述て述て作。捨送曰大字。動綱とぞ  
えり。通らぬ事い。此有家本太日湯房の御観  
玉とえ先生。玉とえ先生。玉とえ先生。玉とえ先生。  
神移。傍々及被申皮士子と作。シキ。玉とえ先生。  
至先生傳。玉とえ先生。玉とえ先生。玉とえ先生。  
あやす。玉とえ先生。玉とえ先生。玉とえ先生。今古  
聲出。のとく人審地と。耳のあら事。小う。音節と  
えり。序中將更に見と。耳のあら事。耳のあら事。  
ト。九月。中將更に見と。耳のあら事。耳のあら事。  
定。意氣。意氣。意氣。意氣。意氣。意氣。意氣。

一寛文十三年七月廿四日保科左中將正之口作。丁酉  
送系。日本の法式を序。葬色とくとく先生。彼亨。傳  
是と斗焉。ヨリ。多御寺。諷經の本を。強と。先生。是と。され  
諷經の事と。行。モ。れ。行。名。神。少。今。少。御。寺。の  
法と。交。行。か。本。の。法。式。と。た。ま。れ。為。御。寺。の。事。と。角  
ら。色。は。若。年。少。也。安。國。友。松。然。即。十。年。後。而。曰。前。少  
胸。少。而。少。也。角。少。也。御。寺。少。也。左。中。將。の。事。と。と。く。の。故  
少。而。不。能。也。御。寺。少。也。左。中。將。の。事。と。と。く。の。故  
て。君。の。為。宗。廟。と。や。一。少。也。御。寺。之。主。則。之。主。母。修。之。の  
。之。主。之。修。之。主。母。修。之。の。之。主。之。修。之。主。母。修。之。の。